The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	弥生時代木製品の研究
Author(s)	中原, 計
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49130
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【22】

氏　　名	中原　計（なかはら　けい）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６８５　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**弥生時代木製品の研究**
論文審査委員	（主査） 准教授　高橋　照彦 （副査） 教　授　福永　伸哉　　教　授　小林　　茂

論　文　内　容　の　要　旨

日本列島は一般に温暖で湿潤な気候にあることから、豊かな森林資源に恵まれており、そこで暮らす人々も生活のあらゆる場面で木材資源を活用してきた。この木材利用という観点からみると、日本列島における歴史の上で弥生時代は大きな画期のひとつである。狩猟採集生活を基本に独特の文化を醸成した縄文時代に対して、弥生時代には朝鮮半島から水稲農耕をはじめとする様々な文化がもたらされたが、その中には鍬や鋤など各種の木製品とそれらの製作にかかわる技術や知識も含まれていた。本論文では、弥生時代を検討対象として木材利用の実態を追究することにより、日本列島における大陸農耕文化の受容と定着の過程を探るとともに、弥生時代の歴史的な特質を浮かび上がらせることを目的に据えている。論文は、全体で 5 章からなる本文ならびに図表から構成され、分量は A4 判 255 頁である。そのうち本文は 400 字詰原稿用紙換算約 490 枚、図表は 119 点となっている。

第１章では、論文の目的・課題とそのための分析の方法、叙述を進めるにあたっての基礎的な時代区分や地域区分の考えを整理しており、第２章～第４章では、弥生時代の木質遺物に関する具体的な検討を試みている。

まず第 2 章では、主に形態や製作技術など考古学的な分析手法により、木製品の変化とそれにかかわる社会の変動に関して検討を行っている。とりわけ、弥生時代に比較的出土数の豊富な広鍬やその付属具に関して製作技法や形態などを分類し、それを適用することによって日本列島の各地における弥生文化の受容の時期や経路などを解明している。その結果、日本列島において製作技法などが変容することにより、技術の伝播が容易となり、広範囲に農耕文化が普及していくという過程が鮮明となった。

第３章では、これまで樹木学など自然科学の研究者が行ってきた樹種同定に自ら取り組み、３つの遺跡から出土した木質遺物をケース・スタディーとして詳細に検討を行い、周辺植生の復元と木製品製作にあたっての利用樹種傾向を明らかにしている。

第４章では、自然科学と考古学の双方の知見をもとに、日本列島各地における木製品の生産と流通の解明を試みている。例えば河内平野では、弥生時代前期には縄文文化を継承する集落において、弥生系の木製品の完成品は入手しても、その製作自体は行わないのに対して、水田稲作を生業とする弥生系の集落ではいずれも原材や原形から木製品を製作しているが、弥生時代前期末から中期になると、すべての集落において弥生系の木製品の製作を行うようになるという変遷が導き出された。また中期の河内平野の沖積地に位置する集落においては、土木・構築用材を近隣から獲得する一方で、鍬・鋤・容器などに適した大径木で特定樹種の材は粗加工段階の未製品を丘陵部の集落から調達し、

さらに木棺などとして選択的に用いられた特殊な材はやや遠距離から運びこむなどというように、木材の入手に多重構造が生まれていることを明らかにした。

最後に第５章では、これまでの成果をふまえて、総括的な考察を行っている。集落周辺の植生によって近在から獲得できる木材には制約があるため、必要な木材は未製品の形で外部から供給を受ける一方で、木製品の最終的な製作は基本的には個別集落で行われているというあり方が、弥生時代における木製品製作の特質であることを指摘し、それを「弥生時代的木材利用」と命名した。さらに、前後の時代についても展望し、木材利用の発展過程を示した。

論文審査の結果の要旨

土中からの発掘品を主な対象とする考古学の研究は、資料の遺存状態に左右されることが多い。有機質である木製品は、出土状態が必ずしも良好であるとはかぎらないため、土器や石器と比較して研究がやや遅滞する傾向にあった。本論文はそうした現状をうち破り、日本各地で最近増加しつつある木質資料を精力的に調査し、植生、樹種選択、製作技法、流通過程などを包括的に検討して弥生社会論にまで論究した研究として高く評価できるものである。

従来、出土木質遺物の樹種の判別は自然科学研究者に全面的に委ねられてきたが、中原氏は樹木学の訓練を受けて自らがプレパラート作成に始まる一連の作業を行い、樹種を同定している。木質科学的知識や技術と考古学的な視野とを結合させて新たな研究領域を築いた点は、木質遺物を対象とした考古学研究の上でも先駆的な意義を持つ。

具体的な成果としては、農耕具や容器類に偏ったこれまでの木製品研究では検討が不十分であった杭や自然木などの分析を新たに加え、周辺植生とも関連づけて木製品の素材調達や流通構造の実態を明らかにした点がとりわけ重要である。河内平野における事例分析を通じて方法論を鍛え、全国各地の木材利用の基本形態を抽出することに成功した研究展開は中原氏の豊かな将来性を感じさせる。また、弥生時代の考古学研究では土器や石器について数多くの検討がなされてきたが、木製品を通して朝鮮半島からの文化移入とその伝播あるいは変容の過程を詳細に検討できることを説得的に示し、木製品研究を他の文物との比較が可能な水準にまで引き上げたことも評価できる。

しかしながら、問題点もないわけではない。木製品製作の専業度の問題をはじめとして歴史的背景の結論付けに十分な議論が尽くされていない点や、木製品以外を対象とした弥生時代研究との間の論理的整合性になお検討の余地がある点などは、大きな課題として残されている。また、地域的な植生の理解にやや粗い部分があること、資料の型式学的検討において吟味の不足する部分が認められることなども、改善すべき点である。

とはいえ、本論文で示された新たな方法論の開拓と個別事象の解明、ならびに日本列島の全域を対象とする包括的視点からの木製品研究の成果は、十分な学術的意義を有するものである。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。